

ヒロシマ平和の旅に参加して

ヒロシマ平和の旅サポーター 高校3年生男子

今回、平和の旅サポーターとして参加させていただき、ありがとうございました。この旅は、私の平和に対する認識が大きく、そして深く覆される貴重な経験となりました。事前に覚悟をもって臨んではずですが、実際に現地を訪れることでしか得られない多くの学びや感情を受け、これまで原爆や平和について理解していたつもりだった私自身の認識の甘さを痛感しました。

この旅で私の固定観念が打ち砕かれたことは、原爆の悲劇が、国境や人種を超えた普遍的な苦しみであるという事実でした。平和記念公園での碑めぐりで、朝鮮半島から連れてこられた方々も原爆の犠牲となられたことを知り、今まで無意識に「日本人だけの悲劇」と思い込んでいたことに気づかされました。



また、戦争の悲惨さは、個々の人間の人生と記憶の中にこそ宿っているということを痛感しました。資料館で目にしたものは、単なる原爆の資料ではなく、被爆者一人ひとりの記憶や人生の証でした。展示品から浮かび上がるそれぞれの物語と当時の日常に触れ、戦争が個々の人生に与える影響の悲惨さに言葉を失いました。

さらに被ばくの証言を通じて、原爆の被害が直接的なものだけでなく、被爆範囲の外でも長期にわたって広がることを知り、被ばくされた方々の人生そのものに刻ま

れた傷跡の重さが伝わってきました。

そして、核兵器による被害は、投下されることだけに留まらないという学びも得ました。小山美砂さんによる講演では、被爆者でありながら行政の支援から漏れる方々の実態や、カザフスタンの核実験被ばくについてお聞きしました。日本が唯一の被爆国であるからと言っても、核兵器による被害は原爆投下だけでなく、核兵器開発や実験などの段階から発生しているという事実から、核兵器廃絶の重要性を身に染みて理解出来ました。

しかし、広島ではそれを単なる歴史の一部にしない様々な取組を行っていました。「ピースアクション in ヒロシマ」で、高校生たちが描く「原爆の絵」の取り組みに触れ、記憶を継承しようとする活動に衝撃を受けました。広島の平和教育の深さに驚く一方で、私が受けてきたものと比べると、広島以外の地域での平和教育の現状に疑問と落胆を抱きました。

最終日、平和祈念式典に参加し、これまでの学びや体験とは異なる、張り詰めた空気と厳かな雰囲気を感じました。原爆ドームを背景に多くの人々が静かに祈りを捧げる姿や犠牲者への深い追悼、平和への誓いから「平和」について深く考えさせられました。



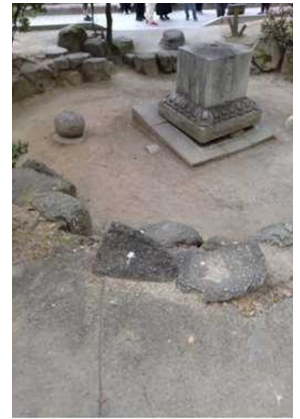
今回の旅を経て、平和を考える上で、原爆が何をしたか、何をできるか、など原爆を主語にするのではなく、それによって奪われた人々の生活や人生、それをどう使うかというあり方について考えていかなければならないと思いました。原爆は強大で恐ろしい兵器ですが、それを使わずとも人々の人生に大きな影響を与える非人道的な行いは歴史上何度も行われてきました。核兵器を廃止することも大切ですが、それ以上に技術を扱う我々人間がまだまだ成長する必要があると思いました。

ヒロシマ平和の旅を終えて

ヒロシマ平和の旅サポーター 高校2年生女子

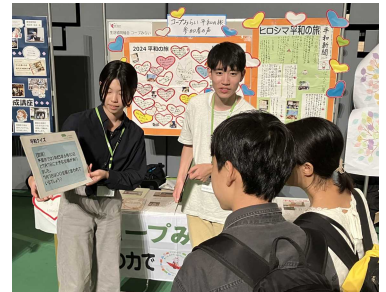
<碑めぐり>

一日目に参加した碑めぐりでは平和記念公園内をガイドさんの説明を聞きながら実際に歩いて回りました。一つ一つお話を聞いて、今まで知らないことばかりでした。原爆ドームは今まで映像で見たことはありましたが以前の状態を知らなかったことや、塀の一部が残っていたり、壊れた瓦礫が残っていることは知らず、実物を目にしてお話を聞いたことで知れたことが多かったです。壊れた瓦礫と共に立ち続ける原爆ドームは、破壊と復興、命の尊さを一身に背負っているようでした。あの日からの歴史を、静かに語り続けているように感じ、原爆ドームの圧倒的な存在感は、言葉以上に心に響きました。また、原子爆弾が投下された高さについて、ガイドさんから建物を使って説明されたときに自分の目で高さを感じることで一気に身近な問題であることを実感しました。そして広島は原爆が投下されたあとに土を被せて土地をならしたことを聞き、ならず前の土地の高さも実際に目にしました。碑めぐりに参加したことで実際に目にしたものが強く印象に残り大切な学びになったと思います。



<ヒロシマ虹のひろば>

二日目に参加した「ピースアクション」では、第二部の「みんなのひろば」で多くの生協の方々と交流をしました。アットホームな雰囲気、各ブースを回って実際に参加したりお話しができて楽しく学ぶことができました。一年かけ大学生と協力して動画を作成したところや留学生と協力して各国の教科書を集めているところもあり、伝える為の工夫がとても学びになりました。私自身も少しの時間ですが平和に関するクイズ出しをすることができ、緊張はしましたが伝える側になるのはとてもいい経験になりました。第一部の「虹のステージ」は、広島歴史を感じながらも、未来に希望を持たせてくれる空間であると感じました。広島という場所が持つ深い意味と、そこで繰り広げられる多様なイベントやパフォーマンスが、観客に強い感動を与えるものだと思います。特に、ステージ上でのダンスや歌のパフォーマンスに感動して、平和への願いが一層強まりました。これからの世代に向けて、平和の重要性を伝える大切な場であると感じました。



<学習講演会：「黒い雨」の実態報告>

二日目に参加した学習講演会では、被爆者と認められていない被爆者の方々の実態やカザフスタンでの核実験のことを学びました。私は被爆者健康手帳の存在や差別から手帳を作らなかった人がいたことは知っていましたが、現在も被爆者であることが認められず、手帳をもらえない人が大勢いることを知りませんでした。また、講師の方の「被爆80年ではなく核の時代が始まって80年」という言葉に不思議に思ったのですが、被爆や黒い雨による後遺症であったり、核は広島・長崎だけでなくカザフスタンでの核実験、ウラン採掘なども問題になっているということを知ったのでとても納得できました。カザフスタンの核実験問題についてもこの講演会で初めて知り、被害者が150万人もいることや核による影響が7世代先まで続く聞いてカザフスタンのことをもっと日本で伝えていかなくてはいけないと感じました。

<最後に>

この旅に参加する中で私たち新しい世代が伝えていく側にならなくてはならない、そして地域や国を超えて多くの人と協力して取り組んでいく問題だということを強く感じました。しかし、今の現状は同じ日本の中でも広島・長崎とそれ以外の地域では意識が全く異なります。ある記事で「広島にいつ原爆投下されたか」の認知度の調査があり、広島県内では70%ほどの認知度に対して、全国では半数にも満たず、更にアメリカでは20%にも満たないという結果でした。このような意識の差の原因は知る機会の差があるからだと思います。広島・長崎ではまず原爆資料館や原爆に関する建物などに訪れやすかったりテレビも原爆に関する放送も多く学びやすい環境があります。全国でも知る機会を増やす為に、例えば原爆投下された日時には各自治体の防災放送で黙祷を促すなどができればその地域は原爆に対する意識も変わってくると思います。大切なのは知り、伝えていくこと。その行動に少しでも貢献していきたいです。